無窮會
無窮會
無窮會

へ 13
明治文庫

無能三才國を序

人を一個の小天地。宇宙柳は別に一世界。是三才

國を分きて線を引。人間の小天地。南京小地の不敢の國。

宅嘗國孫井飯八老柳吉野の名飯は町の名

文ぐ夜半は夜半は波夫うゝ夫の書とゝ

年人人の字を見ル人の異なるゝ

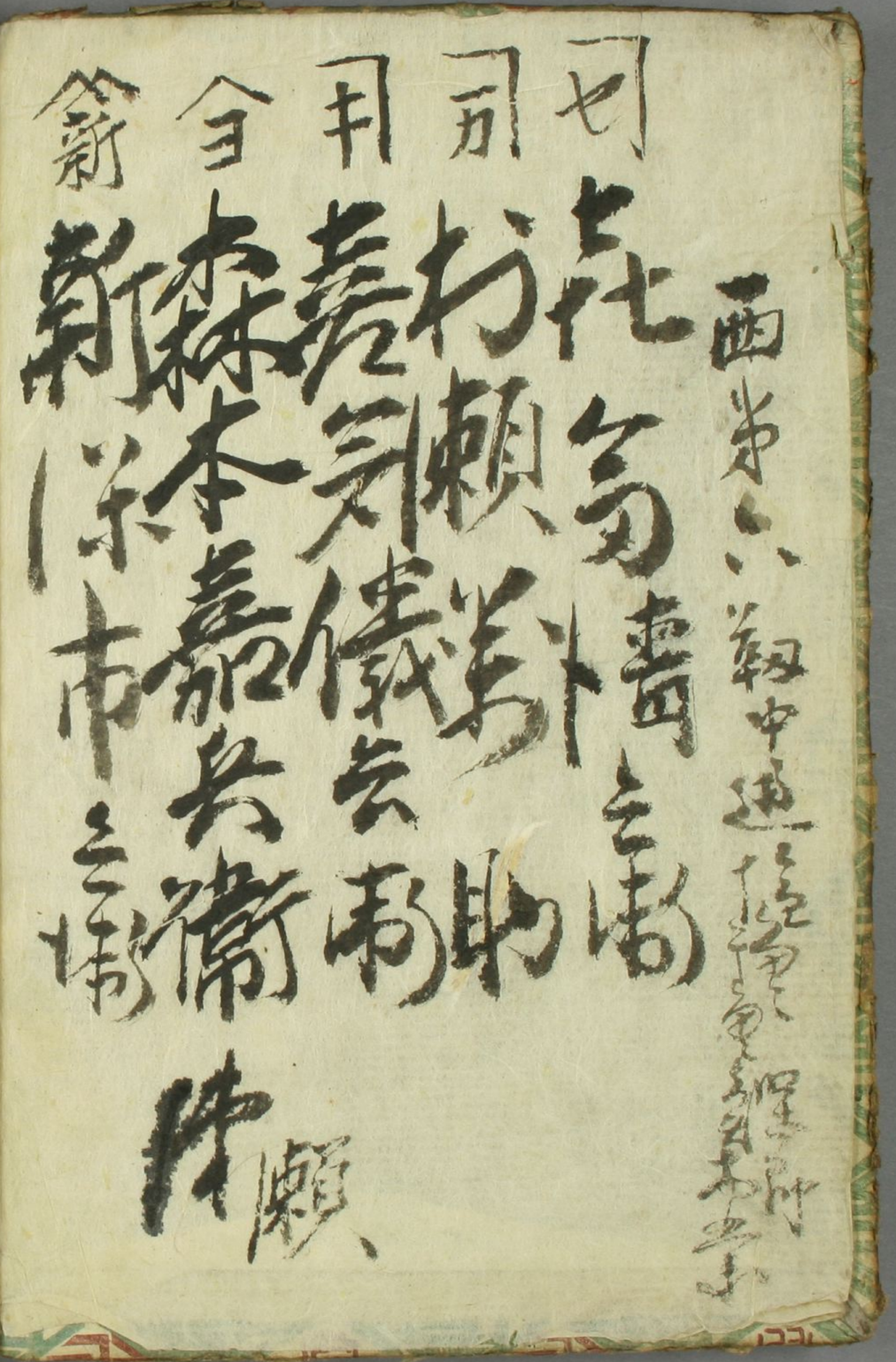
波那。そもゝ小一文字ハ男ハ惟輕薄其

彼思うして彼思ハ。惟軍の外ハ其をし

波興道鋪のおゝ出入帳や西湖霧中の

痒さまにあさまさ。其分ハ外ゝ事ゝちゝ

埋没こ入の外彼雖人百風波の義惟中。



此世界に生れぶされば。圭角を新らく傳授にいる
るの一つ〻なり。とゝ遠こ[illegible]
地理を[illegible]
[illegible]捷徑を示す。[illegible]
[illegible]人間の風波を
[illegible]。因て寫實に序を出すもの
[illegible]

切花情史の友人

春山耕雲

無飽三戈圖會巻第一目録

天文之部

花柳別世界畧圖
忉利天の中二階夜叉宮の圖
日蝕　日のやまひ
意知夜月　孫月
太白
總天之說
有頂天根氣之圖　并說
仝　十二支繰様の支
月蝕　月の障
北極
二十八宿

ムカアツキ
スルトナ
ナイロビヤ
ヤトツン
ヤ
ヤ
ロ
スワドバアトル
ハウサ
コロビヤ
ナイアガリナ

ニメイロ

附言

一 曩よ曉氏の著さて刪の三賊圖會。既よ穴を極め腹を忍ぐ。殺〳〵文句よおのづの〳〵。勸善醒愚のこゝろを含ゝ。此世界の日月草木。鳥獸龍虎をひつさゝく。滑稽の眼を引ぬれ。のとよ残るハ可憐盲同おの新作者撲索〳〵のこゝ附業。法師ゞ娼を買ごとく。聲女ゞ敵を捜よ似ゝり。滑稽のよハのゞ足元よ落て。ゆゝゝ道理もなく。撲りゆくるハ費東去〳〵。たゞ前篇の大當の尻こゝ附ゝく行つゝり。曉氏のゆ手びき。宜〳〵ゆ引廻〳〵と爾云

幻花情史識

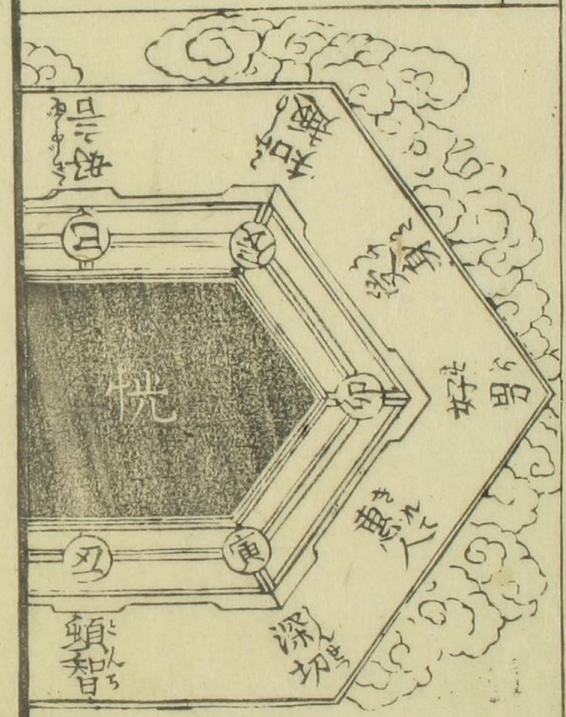
夫天ハ六の數を以て成す。六〳〵三百六十度即ち西洋周天の數なり。故ニ六〳〵ニ高賣ニ身を入れば常ニ六でも無さ、とを悦び或ハ藝子六服の憂ニ泪ひて〳〵噯六〳〵六言を忘れるまでハ六ざる尾ハ宿ニさらふべ。必ふべ六な朋友なし。

（風の友ぐち見）〳〵おめ〳〵も女郎買ニやァ。天と根氣ぐ〳〵ぜヤ今お目ざめろ。馬鹿ら〳〵の根引ぐ則是嗽口茶椀を以て天躰ぎと渾天儀とごちらも附べの故吏附なきの本なり。嗚呼亦幽な附會なふべや蒼天冥〳〵たるべ。のふべ。とハ分らぬ滑稽をいふ成べ〳〵却て又六づく〳〵の説をなき夫一年六度

是を節季と云ふ。客道廻りの〳〵き時ハ節季ニおくる〳〵度。或ハ五日十日十五日といひ延れば晦日又節季となる後る〳〵こと一度。又ハ二度三度より。五度ニいたり。客横道を廻つ〳〵孫月横ニ出るを俗これを踏と云却つ〳〵又茶屋の孫月い〳〵、畏天ニ見ゆる度ごとり或ハ六〳〵首を待夜の深更ニ見せ得ぐハけちな天文を見る人一六經氣ニ損氣の立吏ごり此氣ニ時ハ則ち武士ハ六ニ離れ商工ハ終ニ六ぐ行ば百の内六文拔〳〵。又六な考ハ出ば唯一年三百六十度通ひつめて六周天の度數則是六〳〵三百六十度、近来阿蘭陀の説なり古

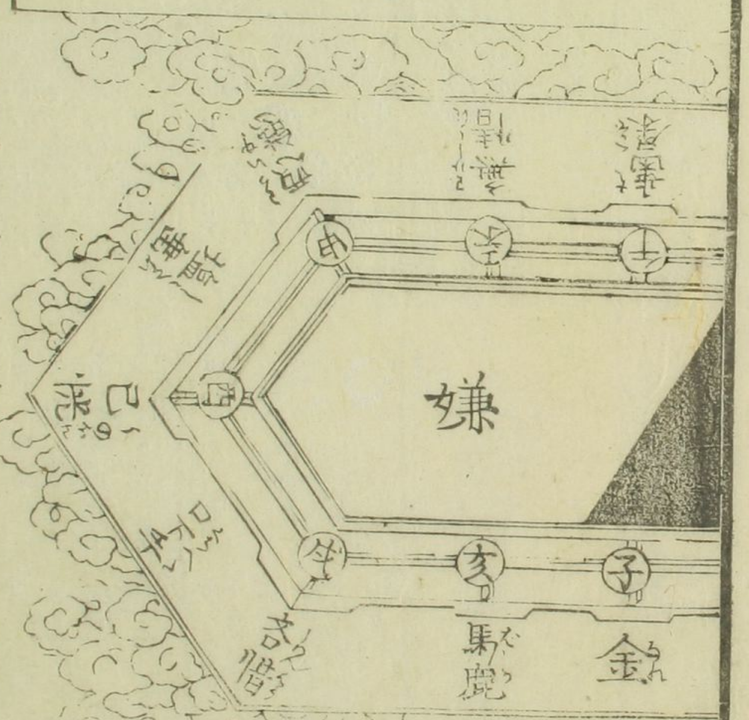
来周天三百八十一度となるものハ。閏年を通ひつめ
算用なり。此を以くの故ま。極道も亦根氣ぎなれぞ
行ひ。回く天根氣の牽強亦御尤千万ならば耶

加利利天の中



出るゆゑハ悦られ
方ハまづ金ぐさ
じまろ次ま頭智
とさて深切ちく
始終ゆうをだし
ま終る深切ぢう
りハ何るとつまも
とも金二両ゆく

二階夜畫なしの之圖



此圖ハ夜畫の圖より出る牽強也。黒ひハ何ま悦られ
ぬゆゑハ悦ぞ
嫌られる方ハまづ
一番ま番屋ぐ
月まつき夫より
無情と来で客
馬鹿ま言れく
終るく
十二支の儒やう
次ま記れ

立。白ハ火を嫌れ立なり。恍られうと来てハ向ふ見へぬ真黒門。
親ゑ苦労をさせ。己も苦労絶ぬ。居續ゑ夜晝の差別なく
五行ゑ有くハ則ち金也。又水也。金ハ色黄なりよつく黄の
祢を志なぐ。金を水のやうゑ遺ふ。水ハとと其色黒し音ハ
もいなり。已ぢり粹ぐつく黒ぐる的也。易ゑ有くつくハ損の
象と則也。數ゑ有つくハ常ゑ九ゑ成四九又ハ八九と成四九八九し
くハ九面もれぐ也。嫌れると来てハ鮭白とおけゑ逢白歯を見
もれぐ。直ゑ代物ゑされる。振れも夜さハ東白ゑ夜具の虱を
見付さぢうぐ仕支ゑ又ゑくも白〳〵とくく嘘をきく。

五行ゑ有くハ木ゑまぐめ。又火のやうゑ怒る易ゑ有つくハ
離の卦ゑして。中絶るぐ一番の得なり。數ゑ有くハ四五なり
死金をつくひ。四の五のと云る〳〵故ゑ。恍られもと嫌れもの。
黒白の遠ひとハ是のぐ云ふ也

○十二支の緑ゆくハ子を始めとも。則ち恍られる方ゑ屬ス。
子ハ子ぐ浮氣也。丑ハ丑ろく廻も考へなく。寅ハ千里を
遠〳〵とせぐ通ひ。又寅詰合くく金を起もとふ支有り。
卯ハ卯の如く。又〳〵ても酔の川へ沉む。辰ハ辰なり知人ぞ知
べ〳〵又腹ぐ立なり。口舌の絶ぬも此なぐひ。辰でも亥でも

いくとんとハ辰でも悪ひ牽強なり。巳ハ身の上なり故ヨ恍られる者ハ子ゞ浮氣より始り。体身の上ヨ終る

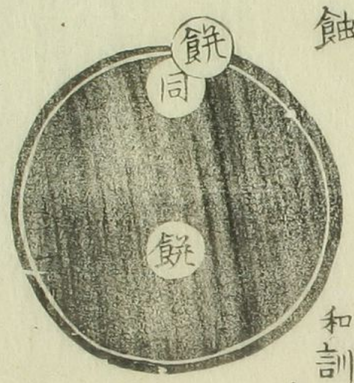
午ハ嫌まる〳〵方なり。午ハ馬也是ハ受られぞ。相手ゞ城の馬場でなれば治まゝ〳〵未ハ未のどく。髪を切てゆゑおく嬉〳〵ゞ。延たゝ〳〵て一盞くふ實ハ五十の副髪なるを去ゝ〳〵。申ハ申とれ爪長く。人の物を抓取さゞる又〳〵くも牙をむく也酉ハ鷄さばきのクワ〳〵ヨ非ゞ。酉ゑのない鬼上り。其ゝ人を躾蹴つゝ毛ぎゝひ仕也（綾鷄ゑ人ゞやゑらひ南京ゞやと云る也是ホハ思ひ鶏べ〳〵戌ハ戌〳〵といひ

ても女ゞ一す〳〵おべつゝヨ。尾を揮〳〵悦ぶ的なり。食つくと深ゝひつこ〳〵。亥ハ猪向ふゝゞゞヨ遺ゝけ。相てゞ堪ゞ部てさしての人猪豆〳〵〳〵ほをゑ〳〵位のゆあり。故ヨ嫌られ立ハ午ゝをかゝ。午〳〵としてゆゝれ。根ハ猪の向ふゝゞ人の情の分らぬヨ終る

○日蝕ハ陰陽を掩ふ陰陽ヨ蠃の象ゝて。故ヨ日影ゞ黄色ゝ〳〵て。顧ゞ蠅を逐也ゞづれまゝゞ日ハひゐなり。食食也無茶食也。漢の唐人いくる支なり。沼なり。緒の如く。酌ヨあゝ〳〵則ちなゝられ。餅なり月の如く。食ヨ過〳〵

即欽。これ毛唐人の洒落なり。是ハこれ月蝕の聯句。作者日月ぐ〜いハ頓著なし。以〻日蝕の牽強となに食自満の客切なき思ひを忍〻曰最前うふ酒をたゝ嫩く呑ぐ大の鰻丑鉢。飯を八ちい二朱の丸を独ぐ片付て。跡ぐ丑文の餅を四十七食て。跡〳〵三ツ残つこく〳〵と伸とバ〻〻お月よりゆるぐ先一ぷく。どこぐ〜まちろふころ此てのころ。咒八九の苦をろろ〜。そろとたゝを押てくる此盆ハ山盛りのつゝのぐたつこ三ツ残つこ。もし〜狐つろ〜みさるのぐやたまぜんろへげれ子ハ誉母〜ぐなのゆ〳〵ぐらふいの支をいふ也。是を以てづいられ。丸分盃ハ餅の三ツ残りこるを牽強〜と知べし。故ハ這ての

日蝕



和訓 ヒノヤ〜ヒ

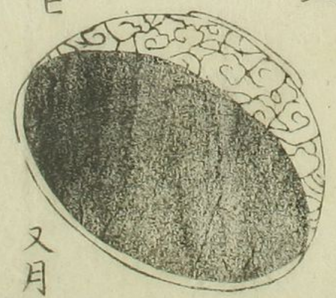
意知夜月

一名 孫月

和訓 候へドモ

上月
下月

月蝕



和訓 月ノヤ〜ヒ

又月ノサワリ

太白

比極

馬鹿。いづれ脾胃の病を煩ひ。黄疸となる。曰く日の病ハ其色黄なる見ゆる。三アクつゝの二アクつゝのとき食損を仕さるなり

○月蝕ハ月坤輿の影ゝ障ぶれて。大陽の輝を受ぶ故ゝ其色黒く見ゆ〳〵光りなし。和訓月の障。又月の病とふ月ハ陰なり。陰ハ女也。娼婦の陽物を受ざるハ月の障の甚しきなれば也。此病ある者或ハ三日長きハ四日痛をつゞけと来ハ引く居なり。一日一歩儲そのふても。月ゝ四アクなる也。四アクなれを一両とふ即是血道のめぐり。曰く娼婦腹を押ていはく

ろ痛〳〵。私のやうゝゝ不淨腹ぶ〳〵難儀なるのハ。誠ゝいんぐいしやゝ。いや今度ハ紅猪口の。紅まぶ此容ゝ類つく。真黒ゝ焼〳〵。是を以く圖いこれ紅猪口の紅の。類りなる牽強なるを知べし。月の障なれば口紅の色黒くして光なし。仙人是を至く利風を吐いぶ〳〵吏なり。其光りを失ふを以くなり。便月蝕ハ陰陽を受ぶ女男ゝ相そぎる理屈ともなゞ。節用集を見る者ハ此説のまを知るを知ん

○意知夜月此月陽氣ゝ屬なる時ハ空ゝ孛名の立吏なり中戸格子前掛下盆屋此世界の一夜月是を孫月とふ

俗ハ四月朔日を一夜月とらふハ誤也。五月の節句。粽の紋日。
いちや月和訓ゆへども。若此月出る時ハ。娼婦の孫月となる。
此月客道を廻る時ハ。部屋住畢天の間ハ出ると一年六
回。前篇ハいふ前の月の欝ハ〳〵て客の孫月也。三月二日五月
四日。七月十四日。九月八日。十月晦日。此月若出ざる時ハ是を中
戸なーといふ然る時ハ十二月晦日孫月直なる。上月下月ハ世
俗の志る前なり回〳〵ハ洩たる又此作を一夜附とらふ也
。北極。日本の地北極地を出ること三十六度此北極ハ志〳〵ゞ。
北ハ北也極ハ極道の極の字なり。得ハ茶屋つゝひの尻を塡と。

変なる天文を見る人。率一度より三度ハ至り。三度ハ五度ハ成
異見の爲人ゞなゝと。終ハ三十六度ハ及び夫より度數の
志れぬ人間界外ハ吟行。故ハ捨而措者必三十六度とらふ
嗚呼亦志るゝことゞなけなり
。太白星ハ五行ハ有〳〵ゝ金星也。日輪を志んハ〳〵て。後ハ
なり前ハなり〳〵廻る星なり。日ハ先ゞつを曉の明星と
いひ。日ハ後れ〳〵入を宵の明星とらふ。客道ハいつ〳〵毎
親の象となる。息子を真ハ〳〵〳〵後ハなり前ハなり。
影ハなり日向ハなり〳〵朝ハ明星と共ハ起〳〵朝戻の

首尾をつくろひ暮ハ夜歩行を苦まして人ハ後をくれ
窮る。脇くり金をこのゝへ又息子のためハ金をかしごゝる。
是金ハ属する星即ち金星なり其ためをたくの
ごゝ。故ハ太白星とゝふ息子の為ハ資財のそぼる時ハ
太白星光りを失ふ。子ハ四討のゝゝる天変とゝ
○二十八宿。一宿ハ儘の川二宿ハやけと成。終ハ居續二十八夜と成
是を二十八宿とゝふ咸く説ゝ。ゝる洩も丁数の限りゝれバゝ
○角宿和訓をゝし「そめき」又「地廻」格子前ハ一夜を明
客の帰るを待ゝ逢ふ是をそぼゝとゝふ。又女のそぼしハ

ハ室宿の生ゝハ室を同ゝ。死ゝ花見ゝ咲ものゝ。夫ハ
勝手ハ胃宿。参宿の深切稀ハ便なき身也箕宿とおゝ。
風の柄の抑宿ハ人情日ゝハ薄くなる客も娼も星宿の誓
文起請の流行ぬ時節。尾ゝれ星のゝゝゝれと思ふ人のゝゝ
なゝ。實ハ斗宿のゝゝゝ
作者禀ゝ。二十八宿咸説をなゝき耶紙数限りゝるを以ゝ。
つゝゝハふゝ触ハゝ。撓なゝ此ゝゝつけ。花子の皷舌文句ゝ似
たり。何のゝゝ分ゝゝゝ。儒者と作者ハ花子高賣同ゝ
這般の文句も出る也扨指を折ゝ数ふれバ昴宿を落し

たり。昴宿和訓まする星。是より又三才圖會の文体に倣ふ。
昔仲居氏畳をたゝいく曰。うゝくお坐り。曰く客よ出るを
昴とゝふ昴ハ坐なり。此星南へめぐつゝ中天よいづる頃をも
つゝく。俗寐むゝの時候の印とゝ星ハ即ち和訓欲と同じ
故ま客の心竊ま早く坐つゝかゝと思ひ。又早く寐ゝ
ぐる曰ゝく昴星とゝひて早く休ゝき時候とゝる也

○總天之説

夫天ハゝと雲つゝむが如ゝ。聖人醉を通ゝて能加減なゝを
ゝひ。西洋聖夫をゝゝゝて。理屈ぐゝ休ゝ横町の喧嘩既

二十八宿之圖

金星ゝ比れば青銅星至ゝく大造なり是金星ハ青銅ゝりゝゝゝゝ高き故ちんさく見るなり重工の非なゝ閲客ゝぐひふとなれ

角宿刷を出して霖る也。亢宿和名「あみがし」二布を
干にを干にとふ五條橋下の方言也。氐宿ハ飯
代の仮店ゑ〳〵翼宿和訓ハ「たきき星」思ひの傳をたゞも
きゑかゞみお客を縛るも本翼宿そのゝ（猶も奎宿。女宿
ハ女身を「うるき星」赤ハ夫婦ゑ張宿鬼宿ハ則ち内心如
夜叉。軫宿ゑつゝかもる風の前なる井宿ハ壁宿の艶く姿ゑ。
心ハ鍾の妻宿。蕩〳〵湯となる如くなるべ〳〵。添臥の身宿
獨霖の氐宿。露妓の真夫の牛宿まて。二人が中の心がし
恵ハ畢嘴の際ゑぐも。悟るきゝ虚宿の嘘ゝ誠なる身

不管。音信不通の天の夏商賣人ゑゞバ彗星が出さと
〳〵頭着ゑ〳〵。挿花挿世界の天文天象花合せ月待
日待ゑ代待や。北辰妙見大菩薩。ゆゝ〳〵夜さハ破軍の
剣。先七夕節のお客ゑ今日ゞゞ居續二十八宿太白星の
うゑき首尾日の烏の日ゞ〳〵紋日戈鳥と世間ゑ金星の氣ハ
弓張の月ゑゝて月ゑ崩〳〵の借錢ゑ漸を以〳〵減るハ猶
是ゞ下強の月のごゝ。質屋の捨利店の敷夜〳〵ゑ満るハ
是上絃。上絃中九八朔下絃一現二會のゐ〳〵らのハ都〳〵加
減の前ゞりゑ。心をとる渾天儀泣〳〵ゝとるも虚宿の分

堅。おりふよ添ひ思まゝよ。總じて此天浮の空烟花國へ故よ
浮色の人の浮氣の立のぼり此天をとつ成べし。野夫塵芥の
芥ひとつ。出たと嫌ひのしまん坊人間天上の楽をまゝ音も
天上仙人も白日昇天と洒落うける。天堂も天よりおさ餅ハ
棚よりおり。おちち老人と金持の一文をしこの百まゝ無性よ
きぶい夏をいひ。千代よ楽しまゝ夏をまゝこれしの馬
麻ハ却つゝ是池の鼈生れつき土を離れぬせゝこまゝ迚も
天上の楽しらゝ皆是仙果ハ有あゝ仙骨のなき大凡夫
此世のゝなる塩魚の地獄へ落る人多し。されゝゝ智

恵もなく。おだての風よ吹上られ登りつめる浮空。這的も天
上をぼつちなし。粗かさげゝ手を放に口開ゝ天のゝをちる。
石亀のおぐんぐも後悔さ紀る立ざるゝ。夫乾を天と乾
ハ是其卦をゝ陽をかされ日を重祢ゝハ去しはあゝ又七
夕のゝまさるよ逢ハ嬉しゝ別づゝ思ゞ中の天の川おりひ
やりなき梵天帝釈ひとつよ扒入鵲のたぢも人目もつむ
よハ心よ遑のなきも亦此天上の楽あるべし。情をまゝ
何をゝ説ん夫地ハ右旋しゝ天ハ左旋に左の旋よ順ゝ
つい誘ゝ浮の空。ふゝたづしてい雷の宿允よ落ると多し

詩に曰天行嶮くつゝよに艱難を出くいる者も此のごし。
餘所目に志ふめ艱難辛苦節季といふ苦ゞなくば情志
らゞの客道へ必綺羅めく綺羅星の分野ハ変して犯ル
をいのくるゝ

無飽三賊圖會一之巻終

葉蘭

織四雄日生の如し